

聖書：使徒 22：23～23：11

説教題：ローマでもあかしを

日時：2014年8月3日

エルサレムではなわめと苦しみとが待っていると聖霊によって示されて来たパウロ。預言者アガボを通して、この帯の持ち主はエルサレムでこんな風に両手両足を縛られて、異邦人の手に渡されると予告されたパウロ。まさにその通りのことが起きたことを私たちは見えています。パウロは何ら律法に反する行動は取っていなかったのに、むしろユダヤ人を配慮して誓願の儀式を行っていた最中だったのに、異邦人を宮の内側にまで連れ込んだと誤解されて大騒ぎになります。パウロは危うく殺されそうになったところをローマ兵によって助け出されましたが、千人隊長に許可を取って階段の上からユダヤ人に弁明の言葉を述べました。果たしてその結果はどうだったでしょう。人々はパウロが異邦人宣教の召しを受けたことに触れるや否や、再び大騒ぎになります。「こんな男は地上から除いてしまえ。生かしておくべきではない。」と。

ローマの千人隊長はパウロを兵營に連れて行きます。彼はユダヤ人たちがなぜこんなにパウロに向かって叫ぶのか、分かりませんでした。パウロの今の弁明もヘブル語で話されていたから、彼には理解できなかったのでしょう。そこでそのわけを知ろうとして、パウロを鞭打って取り調べるようにと命令します。これはパウロにとってピンチです。この拷問のむちは、革ひもに角ばった骨や金属をつけたものでした。これで打たれた者はたとえ死ななくても、回復不可能な体になることは避けられないことでした。パウロは即座に切り札を使います。すなわちローマ市民権です。百人隊長はこのことを聞くと慌てて千人隊長に報告します。千人隊長も慌ててパウロのもとにやって来て、それは本当か？と尋ねます。「私はたくさんの金を出して、この市民権を買ったのだが」と。それに対してパウロは「私は生まれながらの市民です。」と答えます。すなわち少なくとも彼の父の代からそうであった。どのようにしてパウロの家がローマ市民権を持つようになったのかは分かりません。何か先祖に特別なローマに対する功労があったのかもしれませんが。いずれにせよ、私たちがここに見るのは、パウロにはこのような神の備えがあったということです。このエルサレムがローマ兵によって治安を守られていたこともそうでした。もし怒り狂うユダヤ人が好きなように行動できたら、パウロの命はすでになかったでしょう。しかし神は無政府状態をよしとせず、ローマを通して社会秩序を保ってくださったから、パウロはこのようにして生き延びることができた。そして父の代から受け継いだローマ市民権によっても守られたのです。実に私たちもそのような神の様々な恵みの御手によって支えられている者たちです。私が努力して得たわけではない様々な立場、賜物、教育、経験、人間関係、……。神は私たちの人生に対する目的を達成するために、このようなものを私たちが知らないところで備え、支えてくださるお方です。その奇しい御手が私たち一人一人の上にもあることを覚えて御名を賛美したいと思います。

さて結局のところ、問題の本質は何なのか、見当もつかなかった千人隊長は翌日、ユダヤの最高議会の召集を命じ、ユダヤ人による尋問の場にパウロを立たせます。パウロは一旦鎖を解かれ、彼らの前に立って弁明します。23章1節：「パウロは議会を見つめて、こう言った。『兄弟たちよ。私は今日まで、全くきよい良心をもって、神の前に生活して来ました。』」 「全く

きよい良心をもって、生活して来た！」と言い切るパウロを前にして、私たちも思わずうろたえてしまいますが、もちろんこれは完全な生活をして来たということではありません。彼は後ろ指を刺されるような生活はして来なかったと言っているのです。人の前でも、神の前でも。当然、罪を犯したことはあったでしょうが、神の前に正しい解決をし、きよい良心を保って歩んで来た。これを聞いた大祭司アナニヤは、伝統的なユダヤ教の立場から外れた者が何を言っているのか！と思ったのでしょう。そこで彼の口を打て！とパウロのそばに立っている者たちに命じます。するとパウロも言います。3節：「そのとき、パウロはアナニヤに向かってこう言った。『ああ、白く塗った壁。神があなたを打たれる。あなたは、律法に従って私をさばく座に着きながら、律法にそむいて、私を打てと命じるのですか。』」するとそばに立っていた者たちが「あなたは神の大祭司をののしるのか！」と問います。するとパウロは「兄弟たち。私は彼が大祭司だとは知らなかった。確かに、『あなたの民の指導者を悪く言ってはいけない』と書いてあります。」と答えます。これはどういうやり取りだったのでしょうか。おそらくパウロは3節でアナニヤに対抗したのでしょうか。それは不正な命令であると抗議したのでしょうか。そのようにすれば神があなたをさばかれると警告した。しかし5節では、「その人が大祭司だとは知らなかった」と言っています。ある人はこれは皮肉の言葉だと見ます。すなわち、「まさかそんなことを言うあなたが大祭司だとは知らなかった」と。しかしこれはパウロの素直な言葉と取って良いのではないのでしょうか。彼は2節の発言をしたのは大祭司だとは思わなかった。しかしもし大祭司なら、確かに3節の自分の言葉はあるべき限度を超えたものになってしまった。そのことについては非を認め、謝罪しているパウロであったということです。むしろ間違いに気づいたら、すぐ態度を改めるパウロの姿から逆に大事な姿勢を学ぶことができます。こういう彼でこそ、1節で述べた通り、常にきよい良心をもって神の前に生活するということのできたのでしょうか。ルカはこのようにして、この議場の緊迫したムード、対決的なピリピリとした雰囲気をもそのまま伝えようとしたのではないのでしょうか。

こうしたやり取りの後、パウロはメンバーの一部がサドカイ人で、一部がパリサイ人であるのを見て取って、こう叫びます。6節：「兄弟たち。私はパリサイ人であり、パリサイ人の子です。私は死者の復活という望みのことで、さばきを受けているのです。」この復活の問題はサドカイ人とパリサイ人のぶつかる点でした。8節にある通り、サドカイ人は復活はなく、御使いも霊もないと言っていた人たちであったのに対し、パリサイ人は復活も御使いも霊もあると言っていた人たちです。これを巡って双方が対立するのは明らかです。パウロはそれを見越してこのように述べたのでしょうか。しかし復活はキリスト教福音の中心メッセージです。いずれパウロが述べなければならぬことです。この結果、議会は真つ二つに割れます。そしてついにはパリサイ人たちがパウロに組するほどにまでなります。そして「私たちは、この人に何の悪い点も見出さない。もしかしたら、霊か御使いかが、彼に語りかけたのかもしれない。」とまで言い出す始末でした。この結果、論争は益々激しくなり、渦中のパウロの身は益々もって危険となります。そこで千人隊長は力づくでパウロを彼らの中から引き出します。いかに大変な混乱状態に陥ったかが伺えます。命がいくらあっても足りないと言うほどの状況です。

そんな日の夜、主がパウロのそばに現れて話しかけられました。11節：「その夜、主がパウロのそばに立って、『勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかしした

ように、ローマでもあかしをしなければならない』と言われた。」「勇気を出しなさい」という言葉は、イエス様がかつて中風の男に「子よ、しっかりしなさい」と言われた時の言葉と同じです。あるいは湖上で怯えていた弟子たちに「しっかりしなさい」と語りかけた言葉と同じです。主がこのように語りかけたということは、パウロはこの時、恐れていたということでしょうか。それは無理もないことでした。突然ユダヤ人に襲われ、リンチを食らったのは実に昨日のことでした。そこで一生懸命彼らに弁明するも、聞き入れてもらえず、騒ぎは大きくなるばかり。また危うく金属の塊が付いた拷問のむちを受けるかもしれない状況にも置かれました。そして今日はサンヘドリンに引き出されて、激しいやり取りをし、もみくちゃにされながら、やっとのことでその中から助け出されました。この大混乱の中でパウロが肉体的・精神的にどんなに疲労し切っていたかは想像に難くありません。

そんな彼に主イエスは語られました。「あなたはエルサレムでわたしのことを立派にあかしした」と。これがまず主が語られた評価です。この2日間を振り返るなら、そこには何の良いこともなかったかのようでした。望ましい結果は何も得られなかったようでした。すべては失敗に終わったかのようでした。しかし主はそんな誰からも評価されず、結果も出なかったパウロをしっかり見てくださったのです。そして「あなたは立派にわたしのあかしを行なった」と評価して下さった。私たちはここから改めて、私たちのあかしや伝道は単に「結果」から測られるものでないことを覚えさせられます。どんな結果になったか、どんな変化が起きたかということは、私たち人間が一番注目するところです。しかしイエス様はその人がどれだけ「忠実であったか」を見ておられるのです。主は今日の箇所でも23章11節までは一回も出て来ませんでしたが、全部を見ておられ、「あなたは良くやった!」「立派にあかしした」とねぎらいの言葉をかけて下さったのです。

そして主はさらに重大なことを語られました。それは「あなたはローマでもあかしをしなければならない」ということです。この時のパウロは自分がローマに行くことになるであろうとは、ほとんど考えられなかったでしょう。確かに以前はそのことを強く希望していましたが、エルサレムに近づくに連れて、そこでの苦難をひしひしと感じ始め、ついにはエルサレムで死ぬことさえも覚悟する状況でした。そしてこの2日間の出来事は益々それを予期させるものだったでしょう。ところが主はここで「ローマでもあかしを」と言われました。これはとりもなおさず、主がこの自分を必ずローマに連れて行ってくださるという保証でもあったでしょう。この言葉にパウロがどんなに強い励ましと確信を受けたかは計り知れません。これから経験する幾多の苦難の中で、彼の心には常にこの御言葉があり、彼を支え続けたに違いありません。

そしてもう一つ、ここで心に留めたいことは、このローマ行きのビジョンはパウロのエルサレムでの歩みに基づいて与えられたということです。主は「エルサレムであかししたように、そのように、ローマでもあかしをしなければならない」と言われました。つまりエルサレムで立派に証しすることなしにローマ行きはなかったのです。このことは私たちに今、自分が置かれているところで精一杯歩むように!と導くものではないでしょうか。私たちは色々な将来を思い描いているかもしれませんが、しかしそのローマのことを願うあまり、今いるエルサレムでの一日一日をおろそかにしてはならない。世界の中心地ローマでのあかしは、ここよりもっと大変です。その任務は、このエルサレムにおける任務をしっかり全うできないようではとても

できることではないのです。パウロはこの主イエスの言葉によって新たに立ち上がって行きます。これで一気に事が良く進んだわけではありません。なお恐ろしい陰謀が次の日もパウロに張り巡らされます。しかし主は真実です。「ローマでもあかしを」との約束は、様々な困難を通して確かに実現していくのを私たちは見ることになるのです。

以上、このエルサレムにおける2日間、恐ろしい嵐が吹き荒れる中、パウロは何もできないまま、その中に埋没していくかのように見えました。しかし主はしっかりと彼を見ておられて、「エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでも！」と語ってくださいました。私たちも自分の思うようにならない状況があるかもしれません。次々に難題が降りかかって来るばかりで、その中で翻弄され、いつ死に至ってもおかしくないと思われる厳しい戦いの中にあるかもしれません。しかし主は私たちのことをしっかり見ていてくださいます。ただ見てだけでなく、パウロのためにローマ兵を備え、ローマ市民権をも備えて用いられたように、私たちにも必要な助けを色々な形で備え、上から守り支えてくださっています。そして御前で忠実に歩む者に目を留め、評価して下さる。私たちはその主を見上げて、困難の中でも主の前に忠実に歩むこと、主から与えられた使命・任務を立派に果たす歩みをする事へと励まされたい。主はそのように歩む者に「ローマでも」と新しい世界を開いてくださいます。さらにご自身のための大きな働きへと召し、用いてくださるという光栄と祝福へ私たちを導いてくださるのです。